

美濃の刀剣

馬 淵 隆

はじめに

人文展示室2では「今も生きる伝統工芸」として、優れた美術工芸品の鑑賞、先人の創意工夫の中に生まれた今も生きる伝統の見なおしの2点を主眼とした展示のねらいのもとに、郷土の特色を示す美術工芸品、刀剣・刀剣装具・彫刻・美濃焼など実物資料を中心として体系的に区分した常設展示をしている。

刀剣資料については古来、美濃鍛冶・美濃伝・美濃刀として大和・山城・備前・相州らの国とともに五ヶ伝の一つとして輝かしい伝統をもっている。中でも室町期には他国を押し、その生産においても圧倒的な数を誇り、桃山期以後の全国の鍛冶には多大な影響を与えた。美術工芸品としての刀剣は世界に類をみない日本独自の工芸品であり、それはまさに用即美の極地になる鉄の芸術であろう。当館の常設展示にとって欠かせない貴重な資料であることはいままでもない。

現在の展示に当たっては、時代の範囲を江戸末期までとし、1年を4期に分け毎期8口ずつの美濃刀を中心とした展示をしている。なお刀剣展示に当たっては、日本美術刀剣保存協会岐阜支部、関伝鍛練技術保存会、研究家、愛刀家、関係各位の御指導と資料提供の上に成り立っておりその協力に深く感謝の意を表わすとともに、開館以来常設展示として展示してきた刀剣資料をここに報告させていただくものである。

美濃鍛冶

古くから美濃国に鍛冶が存在していたことは、壬申の乱(672)にみられる強力な美濃の兵力と武器、延喜式兵部省にみられる献納された横刀の数の記載、隣国近江でみられる製鉄遺跡、東大寺の荘園、茜部荘・大井荘の成立による大和文化との交流などの点から容易に推察できる。

一般に上古刀の形態は直刀で、平造り・切刀造りのものがほとんどであるが、天慶の乱(939)にみられるように戦闘方法が徒歩戦から騎馬戦へと変化するのにつれ、武器としての刀剣も戦闘に即応するものへと進歩変化していったことは当然のことであろう。そうしたことを背景に平安期には直刀形式から湾刀形式へ、平造り・切刀造りから鑄造りへと武器としてより合理的で機能的な力を持つ日本刀の基本的な形態が完成されていった。

この期の美濃鍛冶は大野郡西郡に住したといわれる外藤(平治のころ)、長基(寿永のころ)、寿命(永仁のころ)、赤坂青墓に住したと思われる泉水(平安末)などの鍛冶が伝書、銘尽にみることができる。

鎌倉期の美濃鍛冶は、大和・山城・備前鍛冶にみられるような名ある鍛冶は見当たらないが、現存する刀剣で美濃刀最古と思われる年紀銘の「美濃国為国上 貞応二年三月(以下切)」の為国があって美濃刀工史上貴重なものとなっている。

鎌倉期の末期に入ると大和千手院系といわれる元重が関に移住したと伝えられているが、それを示す資料は何も残されておらず、事実上、美濃国の名工の出現は、美濃鍛冶中興の祖といわれる大和から多芸郡志津に移住してきた正宗十哲の一人、大和手播系の志津三郎兼氏からであろう。兼氏一門は後に直江に移住し鍛刀していて、直江志津と呼ばれ南北朝期に栄えた。

南北朝期に入ると元重の子といわれ関鍛冶の祖といわれる金重が越前から関に移住、更に大和千手院系の国長・国行が越前から赤坂・不破郡内に、越中郷義弘の子といわれる為継が越前から赤坂へ、南北朝期末期に入ると大和手搔の兼光が一門の鍛冶とともに関に移住、また国内においては直江志津鍛冶が関と赤坂に移住したといわれている。このように鎌倉末期にようやくその存在を知られるようになった美濃鍛冶は従来からの鍛冶と移住してきた鍛冶及びその一門によって急激に隆盛する。室町期の美濃鍛冶は関が中心であった。この地には鎌倉末期に奈良から関に勧請された春日神社がある。荒廃した神社は永享年間に関鍛冶の手により再建されたといわれ同社を関鍛冶の総氏神とし鍛冶仲間によって神社の神事祭礼の一切を司どったという。

大和から移住の兼光を関鍛冶の盟主として千手院系と手搔系の二大流派が合流し新興関鍛冶の鍛冶法である「関伝」を誕生させる。一方春日神社を鍛冶の本所と仰ぎ鍛冶仲間の自治機関、鍛冶座を結成しその拠点とした。この鍛冶座は二大流派の合同した鍛冶集団で、関七流の各流派の代表による合議制によって運営された。この自治制度を関七流による「七頭制」と呼んでいる。

七流は兼光の子孫を中心に生まれたと伝えられ手搔系（兼光と同時期に大和から移住）善定・室屋・良賢、千手院系 奈良・得永、直江志津系 三阿弥・得印をさしている。七頭の構成は、善定兼吉、室屋兼在、良賢兼宗、奈良兼常、得永兼弘、三阿弥兼則、得印兼安で、それぞれ代表として参加しており、そのうちでも兼光系の善定家は総領家・総領職と呼ばれ中心的存在となっていた。善定兼吉には「濃州住兼吉 応永二七年三月日」銘の太刀が現存している。

これら室町初期の関鍛冶に代表される美濃鍛冶の特色は「美濃伝」と呼ばれる新しい鍛冶を生みだし、斬れ味と剛健さを徹底的に追求した実用を本位としたもので、他に類をみない技群の強靱さと斬れ味を誇る機能美にあるとされている。こうして関鍛冶の名は全国に広まり、赤坂鍛冶をも含めて美濃鍛冶と総称するに至った。

室町中期の文明ころから末期の文禄にかけては美濃鍛冶の全盛期である。応仁の乱後美濃においても、下剋上の社会的風潮は激しく、戦国大名が出現し、群雄割拠のいわゆる戦国時代を迎え戦闘も本格的な集団戦へと移行した。武器としての刀剣は、太刀の時代から完全に打刀の時代に入り、その需要は急激に増大し刀鍛冶も乱立の時代となった。

美濃国では関七流の鍛冶を中心に蜂屋に兼貞、坂倉に正利、赤坂に千手院一派及び兼元、清水に岩捲氏信・兼定らをみることができる。一般にはこうした各地の鍛冶をも含めて末関鍛冶と呼ばれている。末関鍛冶は末関物といわれる量産品ばかりでなく、世相を反映した個性の強い作風をもつ入念な作刀もしている。三本杉の刃文と大業物として一世を風靡した兼元、之定の呼称で兼元と並ぶ末関の名工和泉守兼定、独得の刃文兼房乱れを創始した兼房など代表工として挙げることができよう。天文ごろには美濃各地の鍛冶も関に合併され、実用を本位とした美濃鍛冶の末関物は全国的にその名声を高めたわけである。

戦国大名による領国の支配が確立すると、居城を中心に城下町が形成され、次第に経済活動は都市に集中した。こうした社会の大きな変動は美濃鍛冶に決定的な影響を与えてゆく。やがて楽市楽座の政策のもと独占的な鍛冶座組織は消滅し、美濃鍛冶は安定した需要を求めて各地に移住する。美濃鍛冶の移住現象は室町期の鍛冶の中でも目立った存在であり、特徴的な一つの性格を示している。その性格は戦国大名・小名の軍備充実といった社会背景と、美濃鍛冶自体が持つ本質・革新性移動性（渡職人的な一面）から生まれたものであろうか興味深い。

全盛を誇った美濃鍛冶集団もこうして各地に分散し、やがてその地方の鍛冶の中核となり、美濃伝は全国的規模の新刀鍛冶の基本となって生まれ変わっていった。

美濃国内においては関・上有知・下有知・岐阜・大垣・清水・神戸・岩村などで鍛冶しているが、中心は関でその他の鍛冶もほとんどは関鍛冶の影響下の鍛冶である。田代兼元・兼信などの刀工がいたが名ある刀工の出現はなかった。

和泉守兼定は伊勢山田、甲州に出向き鍛刀、尾張志賀に兼延、名古屋に若狭守氏房・後世尾張三作といわれた相模守政常・飛騨守氏房・伯耆守信高・美濃守政常、犬山に兼氏、三河に兼春・氏貞・遠江高天神に兼明、越後に兼先・兼則、越前に康継・兼法、加賀に兼若・兼卷、丹後に大道、奥州会津に和泉守兼定（之定とは別人）、因州に兼先、播州に兼国、安芸に埋忠明寿の鍛冶協力者といわれる肥後守輝広、薩摩に丸田備後守氏房、京に三品派を開いた兼道（大道同人といわれる）・伊賀守金道・丹波守吉道・越中守正俊など出向鍛刀・移住鍛刀している。

江戸時代には徳川幕府による中央集権的な封建制度が確立したため、各大名の城下町が政治・経済の中心地となった。各大名は戦時における武器確保のために刀鍛冶を抱え工として保護したため、有力鍛冶はほとんど有力大名の城下町に定住し鍛刀するようになる。美濃国は過去の歴史が示すように地理上・戦略上極めて重要な拠点であり、幕府は大大名をおかず小藩分立の政策をとった。小藩分立は一国を動かす経済活動の中心となるような大きな城下町を成立させず、刀剣の需要も大都市（江戸・大阪・京都・名古屋）に集中するようになっていて、室町末期のように再び隆盛することはなく、他国への移住は続いたものと思われる。

美濃国内に残った鍛冶は、崩壊した「七頭制」に代わる「鍛冶仲間」と呼ばれる新しい自治組織をつくり、幕末に至るまで活動をつづけている。「鍛冶仲間」は七頭制と同じく七流から頭をだし、その合議にもとづいて運営されている。総領職氏房が尾張に移住した後は善定派の兼門と、得永派の清宣がつとめ「鍛冶頭」と呼ばれていた。末期には鍛冶頭を名乗るのは兼門一名であったようである。江戸期に美濃国内にとどまった鍛冶も寛文以降の刀剣需要の落込みから小刀・剃刃など打刃物への転向がみられ刀鍛冶は極端に減少したが、文政期以後幕末になってややもち直したといわれている。

美濃鍛冶の鍛法

美濃鍛冶の鍛法は鎌倉末期から南北朝期にかけて他国より移住してきた元重・金重・国行・国長が継・兼氏及び一門・兼光及び一門らのそれぞれの特色を合わせて生まれたものである。山城・大和・備前・相州・美濃を五ヶ伝と呼んでいるが、その中で美濃伝は最も新しい鍛法といわれ、その基本は大和伝にあるとされている。

大和伝の伝統は大和千手院系の元重・金重が関に、国行・国長が赤坂に、大和手搔系の兼氏及び一門が志津に、兼光及び一門が関に移住してきたことによってもたらされている。兼氏・金重は正宗十哲の人とされ、越中から赤坂に移住の為継は越中郷義弘の子といわれ、義弘も正宗十哲の一人といわれることから直接的・間接的に相州伝の影響はうけていると思われる。

基本となった大和伝は元来実用刀としての性格がつよいとされ、それを更に強調したのが美濃伝だといえる。一般には華実兼備を目的として鍛刀されているが、美濃伝はその華を捨て実に徹しているわけで、武器としての本質「抜群の斬れ味と折れず曲がらず」を求めその強靱さが最大の特徴となっており、機能・機能美の点では最高峰の位置をしめているといえよう。

室町中期から末期にかけての美濃鍛冶の作刀は数打物・束刀といって量産されたものは多く一般に粗悪品視されているが、この期においても注文打ちによる入念の作は他国に劣らない多くの名刀を生んでいる。和泉守兼定（之定）、兼元らはその代表的な刀工である。

美濃の主な刀工

- 兼 氏** 生国は大和。手搔系の人で包氏と称し鎌倉末期に美濃国志津に一門と移住、兼氏と改める。志津三郎兼氏の名でよく知られ一派をなした。一般に志津と呼ばれている。兼氏は正宗の門人でもあり、正宗十哲の一人としても有名で、美濃鍛冶中興の祖といわれる名工である。
- 直江志津** 兼氏の門下に兼友・兼次・兼利・兼信などがいて志津から直江に移住し鍛刀した。この一派は南北朝期に栄え、のち関・赤坂に移住し鍛刀している。この一派を総称して直江志津と呼んでいる。
- 国 長** 越前に住した大和千手院系の鍛冶で南北朝期美濃赤坂に移住し、赤坂千手院の祖になったといわれる。延文から康暦にかけての鍛冶。
- 国 行** 越前に住した大和千手院系の鍛冶で南北朝期応安年間に赤坂に移住鍛刀。
- 為 継** 越中郷義弘の子で則重の弟子ともいわれ越前から応安年間に美濃不破郡に移住し鍛刀したと伝えられる。銘「濃州住藤原為継 応安七年甲寅(以下切)」の薙刀直し刀が現存している。
- 金 重** 元重の子といわれ正宗十哲の一人に挙げられる。越前敦賀から南北朝期に関に移住した名工で関鍛冶の祖といわれている。一説に金重の子金行の娘に大和手搔の包永を養子にむかえ、その子兼光の子孫が分かれて関鍛冶七流が生まれたという。
- 兼 光** 大和手搔包永の子といわれ包光と称し関に移住後兼光に改めたと伝える。兼光は関鍛冶の盟主とされる。永徳から明德にかけて関に移住したものと思われる。
- 善定兼吉** 善定派の祖。関七流の中ではその性格を最も明らかにしているとされ名門であったと思われる。兼光とともに大和より関に移住したと伝えられ一門には兼信・兼房ら多くの刀工銘が挙げられ室町期におおいに栄えた。新刀期にも関善定を冠する刀工がみられる。
- 和泉守兼定** 兼定を名乗る多くの刀工の中で最も有名で「之定」と呼ばれ、孫六兼元と並び末関鍛冶を代表する名工で、最上大業物として有名である。生国は甲州で関に移り、初代兼定の門人となりのち養子となったと伝える。
- 兼 元** 初代・二代の兼元は赤坂に住した。二代兼元は通称を孫六といい和泉守兼定と並び末関鍛冶を代表する名工である。「三本杉の刃文」で知られその抜群の斬れ味は最上大業物としてたたえられ「孫六の三本杉」の呼称で後世まで伝わり、斬れ味を示す代名詞として使われた。三代又は二代の門人兼元は関に移り鍛刀している。
- 兼 道** 三品派の祖。永禄十二年(1699)天子に剣を献上し陸奥守に任ぜられ大の字を賜わり大道と改名したという。伊賀守金道・米金道・丹波守吉道・越中守正俊の四人の子とともに京に移住し鍛刀。伊賀守金道は幕府より「日本鍛冶惣匠」の地位を与えられる。

参考文献

美濃刀大鑑	得能一男
日本の美術 刀剣大和と美濃	文化庁
日本の美術 工芸(刀剣・武器)	文化庁
刀剣のみかた 技術と流派	広井雄一
日本刀全集	本間順治・佐藤貫一
日本刀紀行 五ヶ伝の古里を行く	佐藤寒山

人文展示室2 常設展示 刀 剣 展示資料一覧 (開館以来昭和54年10月末までのもの)

太刀 銘三条	刀 無銘伝盛景
鉾 無銘	太刀 銘吉則
太刀 銘国光	脇指 銘兼景
太刀 銘備前国長船住近景	刀 銘兼長
太刀 銘兼氏	刀 銘兼常
刀 銘越前康継	太刀 銘兼友
刀 銘兼元	短刀 銘兼鶴
刀 銘和泉守兼定 大永六年正月吉日	脇指 銘善定藤原兼門 願主武藤宗三良嘉門
刀 銘兼常	
刀 銘兼房	刀 金象嵌銘正宗
刀 銘奉籠春日大明神美濃関備中守	刀 無銘伝西蓮
藤原清宣 万治三年庚子二月吉日	刀 無銘伝長光
刀 銘兼吉	刀 無銘兼光
	太刀 銘兼氏
太刀 銘康光	刀 銘兼定
太刀 無銘伝兼光	刀 銘兼元
短刀 銘信国	刀 銘兼恁(兼松)
太刀 銘貞綱	短刀 銘兼氏作
刀 無銘伝志津	薙刀 銘家久
刀 無銘伝志津	
刀 銘兼氏	刀 銘肥前国住人忠吉作
刀 銘濃州関住兼常	脇指 無銘伝志津
文禄五年十二月吉日	脇指 銘粟田口近江守忠綱
刀 銘飛驒守氏房	太刀 銘正国
刀 銘丹波守藤原照門	刀 銘長勝
	刀 無銘大道
太刀 無銘(寺伝小烏丸)	刀 銘濃州住寿命
太刀 銘真則	刀 銘善定藤原兼次
太刀 銘助真	刀 銘豊後守金高
太刀 銘景依	
刀 無銘直江志津	刀 無銘伝志津
刀 銘濃州関住兼村	刀 無銘伝直江志津
刀 銘兼元	刀 無銘伝村正
短刀 銘兼友	刀 銘濃州関住兼成作 天文七年八月日
短刀 銘兼房	脇指 銘相模守藤原泰幸
刀 銘濃州関相模守兼安 寛文十一年吉祥日	太刀 銘兼吉
	刀 銘長広
太刀 銘国宗	短刀 銘兼房

- 脇指 銘兼助
- 太刀 銘備州長船盛光 応永二十二年八月日
 刀 銘盛久
 刀 銘伊勢守国輝
- 太刀 銘国次（民国次）
 刀 銘兼光
 刀 銘兼元
- 短刀 銘兼卷作
 刀 銘陸奥守大道作
- 脇指 銘備前守藤原氏房
 刀 銘近江守藤原清宣
- 刀 折返銘備前国住雲（生）
 刀 無銘伝兼光
 刀 銘備州長船祐定
 刀 銘兼元
- 短刀 銘濃州関住兼氏作
 天文二十四年七月
- 短刀 銘兼房
- 短刀 銘相模守藤原政常
- 太刀 銘於千住太々土壇弘切手山田五三郎
 応需固山宗次作之
 天保十三年二月日
- 太刀 銘直政用之（金銘）友成
- 太刀 銘備前国長船住右近将保弘造
 徳治二年十月日
- 太刀 銘備前国長船住十郎左衛門尉春光
 天正二十年八月吉日
 刀 無銘伝金重
- 脇指 銘兼房
- 短刀 銘相模守政常入道
 刀 銘永貞 元治元年三月吉辰
- 短刀 銘美濃国御勝山麓住藤原永貞
 文久二年八月日
- 太刀 銘長光
 刀 無銘伝包永
- 太刀 銘兼氏（金象嵌）松平利隆用之
- 刀 銘兼基
- 短刀 銘和泉守兼定
- 槍 銘美濃大垣住国實
- 脇指 銘備中国水田住国重作
- 太刀 銘君万歳
 備前国長船住横山祐包
 嘉永四年二月友成五十八代孫
- 刀 銘慶長十八年正月日肥前国忠吉
 埋忠明寿五十六才（花押）
- 刀 銘氏房入道作
- 刀 銘兼元
- 刀 銘備前国住長船源兵衛尉祐定作
 天正四年八月吉日
- 刀 銘肥前国住近江大掾藤原忠（廣）
- 脇指 銘兼成 天文二年八月吉日
- 太刀 銘延正（信正同人）
- 脇指 銘薩陽土奥次右衛門元安
 伊藤傳右衛門藤原祐尚應望
 文化五戊辰年八月吉日作之
- 太刀 銘長円
- 刀 銘濃州住兼元
- 槍 銘兼元
- 刀 折返銘新藤五国光
- 刀 銘備前国長船十郎左衛門尉春光
- 脇指 銘美濃守政常
- 槍 銘相模守藤原政常入道
- 刀 銘濃州住兼光
- 太刀 銘行平
- 刀 無銘伝志津
- 刀 無銘伝直江志津
- 刀 金象嵌銘江
- 刀 無銘伝為継
- 刀 銘出雲守吉武
- 刀 銘筑前住源信国吉政
- 脇指 銘陸奥守大道
 天正十八年二月日